

ウィリアム・モリスとリチャード・ジェフリーズ —ユートピアと反ユートピアの狭間—

木村 竜太

はじめに

モリスの言によるなら、ユートピアは作者自身の精神を表現するものである^{*1}。その意味でモリスの描いた『ユートピアだより』(*News from Nowhere; or, an Epoch of Rest: Being some Chapters from a Utopian Romance*[1890年に連載])は「モリスの未来社会」であった。モリスは、しかし、その自身のユートピアとは正反対の世界に見える世界観が描かれているとも言えるリチャード・ジェフリーズによる『アフター・ロンドン』(*After London: or, Wild England*[1885])を高く評価している。

同じく『ユートピアだより』に影響を与えた書としてはエドワード・ベラミーの『かえりみれば』(*Looking Backward 2000-1887*[1888])が挙げられよう。『かえりみれば』に関しては、モリスはそこに描かれているのは中央集権化された国家によって運営される「国家共産主義 (State Communism)」だと述べ、ベラミーが社会のシステムにしか目を向けていないという批判をしている。またベラミーが極めて限られた考察しかしておらず、大都市での生活しか考慮に入れていないことをも批判する。そしてそのことがモリスにシステムの考察のみに限定されない社会の構想を促したのであった^{*2}。

*1 William Morris, “Looking Backward(1889)”, May Morris(ed.), *William Morris: Artist, Writer, Socialist*, Oxford, 1936, vol.2, p.502.

*2 モリスの『かえりみれば』論に関しては“Looking Backward”, *ibid.*,

『アフター・ロンドン』は、『かえりみれば』に対して、モリスの未来社会論やユートピア論との比較の中で取り上げられ、問われることはそれほど多くはないと言える。その中で、たとえば、A. L. モートンは、モリスがそこに見出したのは「まさに希望のない野蛮な未開状態、いかにも活力に欠ける貧しい中世さながらの社会の姿」であるが、その文明の破壊された後のイギリスの姿にモリスの好みに合致したものがあったのだとする。ただ、その未来は「次善のもの」に過ぎず、そうした状態を避け得ることをモリスは信じていたと言うのだ。そして、ジェフリーズの著作はモリスの『ユートピアだより』の「裏返し」であり、その点で「モリスのユートピア像の形成に決定的な力」を与えたのであるとする^{*3}。ポール・マイヤーは、モートンのジェフリーズに対する批評は厳しすぎるものだとする。マイヤーはモリスの社会主義研究の著においてジェフリーズの『アフター・ロンドン』を研究することは「モリスのユートピアの重要な側面の極端な形態」を調べることなのだとし、モリスのユートピア構想におけるその重要性を論じている。またジェフリーズの『アフター・ロンドン』はペシミスティックなユートピアではないとし、モリスの思考に存在した「『バーバリズムか社会主義か』という選択を形式化し、実体化する」ことを助けたのだと述べ、評価するのである^{*4}。また J. R. エバットソンは同じくモリスへのジェフリーズの影響を語りつつ、確かに彼ら二人の描く世界の違いは大きくとも、それらの違いは概して「基調 (tone)

pp.501-7を参照のこと。モリスは『かえりみれば』を、真剣に考慮され、読まれるべきではあるとしている。だが、それは社会の再建へ向けての「社会主義者のバイブル」としては読まれるべきではないとする (*Ibid.*, p.507)。また拙著『空想と科学の横断としてのユートピア —ウィリアム・モリスの思想—』見洋書房、2008年においてもベラミーの『かえりみれば』についてモリスの未来社会論の考察に際して論じているので参照されたい。

*3 A. L. モートン (上田和夫訳) 『イギリス・ユートピア思想』未来社、1967年、200-2頁。

*4 Paul Meier (translated from the French by Frank Gubb), *William Morris: The Marxist Dreamer*, Sussex, 1978, pp.68-73.

と強勢 (accent) の問題」なのだとして、たとえばその世界における教育などの描き方に、もちろんその強調するところに変化はあれども、類似点を見出せるのだとする。そしてジェフリーズの著作の影響はモリスのユートピアのアイデアの中にはっきりと見出せるだけでなく、他の後期のロマンスにも見られるのではないかと論じる^{*5}。一方で、キャロライン・サンプターは、ジェフリーズがマキャベリを評価していることや彼へのマキャヴェリの影響を指摘し、『アフター・ロンドン』にも現れるその要素を、ジェフリーズの動物的性質を持つものとしての人間理解などを踏まえつつ論じることで、ジェフリーズの描く世界とモリスの描く世界は決定的に異なるのだとしており、単なる影響関係でこの二人の著作を語ることで見過ごしてはならない事実、すなわちモリスとジェフリーズの間にはっきりとした差異があることを強調する^{*6}。

こうしたモリスのユートピアとジェフリーズの著作を比較する論の少なさ^{*7}は、『アフター・ロンドン』が、モリスのユートピアとの関係性を離れて考察した場合、そもそもユートピアとして書かれたものなのかどうかという根本的な問題にも関わってくるだろう。ジェフリ

*5 J. R. Ebbatson, "Visions of Wild England: William Morris and Richard Jefferies", *The Journal of the William Morris Society*, vol.3, no.3 (Spring 1977), pp.12-29.

*6 Caroline Sumpter, "Machiavelli Writes the Future: History and Progress in Richard Jefferies's *After London*", *Nineteenth-Century Contexts*, vol.33, no.4(September 2011), pp.315-31.

*7 もちろんモリスがジェフリーズの著作を興味をもって読んだこと、あるいは影響を受けていることは多くのモリスについての伝記・関連著作だけでなく、ジェフリーズについての伝記・関連著作にも触れられている。しかし、そこにおける扱いは決して大きなものとは言えない。たとえば、モリスの包括的な伝記を書いたフィオナ・マッカーシーはその著の中で、『アフター・ロンドン』にはわずかな行数で触れるのみである。そこでマッカーシーは、『アフター・ロンドン』をペシミスティックなものとしており、モリスがその悲観的なヴィジョンには賛同しなかったとする。ただ、『アフター・ロンドン』は「モリスが直感的に知っていたこと」を説明したのだとして、その影響を語っている (Fiona MacCarthy, *William Morris: A Life for Our Time*, New York, 1995, p.517)。

ーズ自身は、この本は決して小説などではなく、むしろロマンスなのであり、独創的なものだと言ったという^{*8}。ブライアン・モリスは、イギリス全土が文明の世界から緑生い茂る世界へと帰り、ロンドンが徹底的に破壊され、毒の源泉になっているというこの野蛮な未来社会を描いたとはいえ、ジェフリーズは近代生活への単なる批判者でもなく、都市やロンドンを憎んでいたわけでもないとする。さらにジェフリーズの本には「ユートピア・ヴィジョン」は欠けており、またジェフリーズは「ユートピア的プリミティヴィスト」ではなかったとしている^{*9}。

ユートピアがその原義の通りどこでもない国でありつつも理想の国であると言うならば^{*10}、確かにジェフリーズの描く世界は単純にユートピアを描いたものであるとは言い難い。それよりも荒いバーバリズムへと至ってしまったジェフリーズの描く世界は一見したところ反ユートピアとでも言える世界観を持つかのように見える^{*11}。一方で、もちろん、『ユートピアだより』の副題にすでに「*Being some Chapters from a Utopian Romance*」とあるようにモリスは明らかにユートピアを描くことを目的としてこの物語を書いたと言える。そこで、本稿で

*8 Edward Thomas, *Richard Jefferies*, London, 2008, p.232.

*9 Brian Morris, *Richard Jefferies and the Ecological Vision*, Oxford, 2006, pp.229-36. ブライアン・モリスは、ジェフリーズの思想を論じるにあたって次のように述べている。ジェフリーズは『文明』や都市生活を否定したわけではない。ジェフリーズはモリス同様、「人間と自然の、あるいは都市/町と田園との仲裁、ある種の融合」を試みたのだという。だから、ジェフリーズが産業資本主義のある側面を批判的に見ていたからといって、彼は決して田園生活や過去をロマン化していないのである (*Ibid.*, pp.354-62)。

*10 川端香男里『ユートピアの幻想』講談社学術文庫、1993年、23-30頁。

*11 W. J. キースは、ジェフリーズの描く世界は『ユートピアだより』の「過度にシンプルな楽観主義とは対極に位置する」とするが、一方で「ハックスリーやオーウェルの逆転したユートピアの計算されたような悪」という性質を帯びているわけではないとも指摘している (W. J. Keith, *Richard Jefferies: A Critical Study*, Toronto, 1965, pp.118)。ジェフリーズの描く世界が完全に陰鬱な野蛮な世界であるのかどうかということは本稿でも「希望」を軸に考察したいと考える。

は明らかなユートピアと一見したところ反ユートピアとも見える物語、これら二つの物語の関係性を再考察したい。またそれによってユートピアと反ユートピアの狭間を捉えなおす一端としたいと考える。その際にはそれら二つの物語において重要な役割を与えられている二人の女性、『ユートピアだより』におけるエレンと『アフター・ロンドン』におけるオーロラに注目をしつつ、その考察を行うこととする。

1 ジェフリーズの世界、モリスの世界

ジェフリーズの『アフター・ロンドン』は1885年に出版されており、モリスがその本を興奮をもって読んだことはよく知られている。モリスは1885年4月28日付けの手紙で、「この奇妙な本」を読み、自らの胸の内に「ばかげた希望」がわき上がったと述べている^{*12}。J. W. マッケイルによれば、モリスはジェフリーズのその本を「称賛することに飽きることは決してなかった」。それはモリスの心に適ったものであり、「人口が減った後のイングランドで本当に起こり得ること」だとモリスが考えていたことを表していると言うのであった^{*13}。マッケイルも指摘しているように、モリスがその二週間ほど後に送った手紙（1885年5月13日付け）の言葉を見るとモリスがジェフリーズの影響を強く受けていることが分かる。モリスは、その手紙において、文明は「破滅する運命にあり、それはおそらくは近いうちに起こるだろう」と語り、「バーバリズムが世界にもう一度あふれる」ことを考えるのは慰めなのだと述べているのである^{*14}。

確かに、キャロライン・サンプターが論じているように、ジェフリーズが描くバーバリズム的な世界やそうした世界への逆戻りについて

*12 Norman Kelvin(ed.), *The Collected Letters of William Morris*, Princeton, 1984-96, vol.II, p.426.

*13 J. W. Mackail, *The Life of William Morris*, London, 1899 (Two volumes bound as one, New York, 1995), vol.II, p.144.

*14 Norman Kelvin(ed.), *op.cit.*, p.436 及び J. W. Mackail, *op.cit.*, vol.II, pp.144-5.

の彼の理解は「モリスの文明の終焉の夢」とは全く違うということは事実であろうし、「ジェフリーズにとっては人間の性質は常に同様のもの」、すなわち人間とは残忍さ、個人主義的性質などを持つ存在であり^{*15}、そういう意味ではジェフリーズの描くこの未来の世界は基本的には変わらない性質を持つ、どこか野蛮な世界へと帰ってしまったがためにもっと悪いものになってしまっているとも言えるだろう。そこで、これら二つの物語の類似と差異、あるいは二つの物語の「狭間」の考察への糸口として、まず二つの物語の世界を概観したい。

『アフター・ロンドン』に描かれる世界は大災害が起こった後の緑生い茂るイギリスを舞台としている。金持ちや上流階級は逃亡しており、残された者たちは基本的には下層階級や最も無知な者たちである。彼ら残された者たちは「無知、粗野で読み書きもできない」という状況であり、かつての文明が誇っていたことも名目のみ知られているか、それさえも知られていない^{*16}。少数の文字の読み書きをできる王侯貴族が支配しているのだが、そうした文字の読み書きの技術、必要性もかつての社会とは比べものにならない。そもそも学問、教育は軽蔑されるものであり、それよりも肉体の活動が重視される世界なのである。貴族の好意や富によって自由人である人以外は奴隷のような存在である。また森の住人としてのブッシュマンやジプシーと呼ばれるより野蛮で、ときに殺戮を好む危険な存在が描かれる。まさにキャロライン・サンプターが述べるように、動物的性格を持った存在としての人間が描かれているのである。確かにそういう点では、この世界は機械産業的なものがないという点を除けば、モリスの描くユートピアとはあまり似ていない世界観が支配しているとも言えよう。それは高貴なる野蛮でもないし、人が夢見る世界でもないだろう。

しかし、こうした世界にあって主人公たるフェリクスだけは異質な

*15 Caroline Sumpter, *op.cit.*, p.316 及び p.327.

*16 Richard Jefferies, *After London: or, Wild England*, Chesterville, 2013, pp.18-20 (以下 *After London* と記す)。

存在として描かれる。彼の家は貴族であるが金も権力もない。彼は他の貴族と交わったり、肉体の能力を誇ったりすることもせず、またスポーツも苦手である。彼の唯一得意な武器は弓であるが、これは貴族の誇るべき武器ではないとされていた。フェリクスは愛するものは読書であり、知識であった。フェリクスの望みは恋人であるオーロラとの結婚であったが、彼にも彼の家にもその力はないと見ても良い。そのことが彼が成功を求めて故郷を離れ、世界へと出て行く原因となる。フェリクスにあるのは、そうした希望とわずかに残る本から得た知識と弓の技術だけである。

こうした点でフェリクスはこの野蛮な世界の、支配構造の中に属しつつも、そこから浮いた存在として、あるいは離れ得る可能性を持つ存在として描かれる。そして、このことを後押しするのはフェリクスが出会ったある召し使いとのエピソードであろう。旅の途上、食事を提供してくれた人との会話の中で彼はその人が召し使いだと知る。ここにおける召し使いは奴隷と同義である。フェリクスが彼の暮らしてきた社会の習慣に従うなら、奴隷に対して偏見を持つべきであり、一緒にテーブルにつくべきでないし、触れるべきではない。しかし、彼はその社会の有り様を軽蔑しているはずだ。フェリクスはその野蛮な社会の習慣に従うべきか心の命ずることに従うべきかを考え、終に後者を選び、奴隷のテーブルで食事をし、握手し、お礼をして別れるのである^{*17}。この世界の中で、フェリクスは明らかにその異質さを我々に見せている。それをしてこの物語のユートピア性だとは言えないまでも、この野蛮な世界の希望だとは言い得るだろう。

一方、モリスが『ユートピアだより』に描く世界は、ジェフリーズの世界と同じように「文明」が終焉した世界であるが、その世界観はまるで異なっているとも見える。そもそもモリスの描く「文明の終焉」は自然が起こした不可避的かつ無慈悲なものではなく、人が革命

*17 *Ibid.*, pp.167-9.

によってもたらしたものであり、そこに革命という争いがあったにせよ選択されたものである。そして、『ユートピアだより』の最後の文章、「もし他の人たちも私が見てきたようにそれを見ることができるなら、その時にはそれは夢ではなくヴィジョンと呼ばれ得るだろう」^{*18}に見られるように、それはモリスの生きた時代の人々が、モリスの生きた時代以降の人々が自らそれをヴィジョンとして捉え、つくり上げていこうとする世界である。もちろんそれはユートピアであり、モリス一人が見ている限りではモリス一人の夢であり、希望である。その意味では『ユートピアだより』内での「ウィリアム・ゲスト」という存在が経験する旅はゲストのものであると同時にモリスの希望の旅である。それが読者へと開かれて、モリスの言葉通りに共有されたもの、共有し得るものとなってこそ、ヴィジョンとなるだろう。

そのモリスの夢であるゲストの経験は、革命後（物語では1952年に起こることになっている）の22世紀の社会でのものである。その世界は「組織化された窮乏」^{*19}である文明のもたらした悪、汚さ、醜さが消え去った世界である。「人によってつくられ、形を持つものは…何でも、芸術作品、あるいは芸術への装飾であらねばならない」^{*20}と述べるモリスに相応しく、美しい世界が展開されている。しかし、ジェフリーズのそれとは違って、機械や動力は決してそこにいる人間の理解を超えたために単に消滅したわけではない。機械や動力はモリスの『ユートピアだより』では前面に出てこないにせよ、存在はしているのである^{*21}。そして、モリスの描く世界もあらゆる人々がむさぼ

*18 William Morris, *News from Nowhere; or, an Epoch of Rest: Being some Chapters from a Utopian Romance*, May Morris(ed.), *The Collected Works of William Morris*, London, 1966, vol.16, p.211 (以下 *News from Nowhere* 及び *CWWM* と記す。『ユートピアだより』については、川端康雄訳『ユートピアだより』晶文社、2003年を適宜参照した)。

*19 *Ibid.*, p.95.

*20 William Morris, "The Socialist Ideal (1891)", *CWWM*, vol.23, p.255.

*21 たとえば、『ユートピアだより』には蒸気機関にとってかわった圧力で動く乗り物が描かれている。モリスはそれについては過去の人間である「私」

るように読書をし、学問、研究をしているという世界ではないが、それは決して知識が否応なく忘れ去られてしまったからでも、単に必要なとしてかえりみられないということでもない。そこには選択肢が存在するのだ。

物語の前半はゲストの目覚めたハマスミス、それはロンドンにおけるモリスの居住地であったが、からロンドン中心部への旅である。そこでゲストは新しい時代のことを学ぶことになる。人々の暮らしぶり、お金の存在しないこと、人々が美しいものをつくってそれを愉しんでいること、教育について（あるいは現代的な意味での教育のないことについて）等々。そして大英博物館に住んでいるこの世界の歴史をよく知るハモンド老人との対話。この対話により、ゲストはこの世界が革命を経て達成された新たな世界であることをはっきりと知識として知ることになる。そして、後半は再びハマスミスからテムズ川を遡っての旅である。それはモリス自身が過去に経験した船旅を基にしているのであるが、まさに自身の過去の幸福な経験から導き出された未来の希望の描写である。美しい牧歌的な田園風景を通して、ゲストはこの世界の本質を直に感じ取っていくのである。「今や世界は成熟し、より賢明になったのであり、私は私の希望が終に実現したのを見ようとしている」*22、テムズ川の旅に出る前にゲストが感じるこの感覚こそがこの旅の重要性を示している。クリシャン・クマーはモリスのユートピアにおける旅の重要性を論じ、テムズ川を巡るこの旅こそが「モリスのユートピア・ヴィジョンの主要な意味」を伝えてくれるのだとしている。また彼はゲストのこのテムズ川の旅にはモリスの個人的な旅の性質が見られるとする。「テムズ川はモリスにとって常に社会の醜さや抑圧からの『ユートピア的な』避難所」であったのだから*23。

には理解の範囲外だとして詳細に語ることはしない (*News from Nowhere*, pp.162-3)。

*22 *Ibid.*, p.144.

*23 Krishan Kumar, "A Pilgrimage of Hope: William Morris's Journey to Utopia",

読者としての我々はこのモリスの個人的な夢に共感し、そこに希望を見出し、ユートピアの力を見出すのである。

ジェフリーズの描く世界とモリスの描く世界は同じく十九世紀の「文明」の終焉した世界でありながらも決定的な対比があるとも見える。正反対とも言える世界がそこには描かれていると言えるだろう。「文明」の終焉を除けば、あり得る類似としてそこに見られるのは希望というものの存在であろう。そこで、次にその希望を軸にこれらの物語を考えてみたい。その際にはその両者の希望を支える、あるいは希望を巡る輪の中心にいる登場人物としての女性に目を向けてみる^{*24}。

2 未来社会における女性の役割Ⅰ —『アフター・ロンドン』—

『アフター・ロンドン』と『ユートピアだより』の両著において女性の役割は極めて大きいものがある。両著共がある女性を巡る展開をそのひとつの構造としていると言えよう。しかし、ジェフリーズの『アフター・ロンドン』の場合はその女性がほぼ常に不在のままである。主人公であるフェリクスの旅の動機、目的は女性＝オーロラでありつつも、その旅においては彼女の存在はフェリクスの想いの中のみある。しかし、彼女は不在であることによって、フェリクスにとってもまた読者にとっても度々強く想起される存在であり、またかすかにではあるかもしれないが希望の存在でもある。

『アフター・ロンドン』において、フェリクスは恋人であるオーロラとの結婚を望んでいる。しかし、先に述べたように彼には、彼の家

Utopian Studies, 1994, vol.5, pp.89-107 (引用文は p.95 及び p.100).

*24 ただし、ここではフェミニズム論や女性論を論じたいわけではない。社会主義思想、ユートピア世界における女性論、女性に関する問題は重要な議論となろうが、その点に関しては別の機会に譲りたい。モリスのユートピアにおける女性論については、たとえば、Jan Marsh, "Concerning Love: *News from Nowhere and Gender*", Stephen Coleman and Paddy O'Sullivan (eds.), *William Morris & News From Nowhere: A Vision for Our Time*, Bideford, 1990, pp.107-25などを参照のこと。

にはその力がない。そのような状況を打開すべく彼は自らのつくったカヌーで世界に出て行こうとする。その旅に出る前に何とかオーロラと会いたいのだという彼の思いは、オーロラの住む城で行われる祝宴に参加する事でかなえられるはずであった。しかし、オーロラは娘とフェリクスとの関係をあまり快く思っていない父の命令により、宴の間、フェリクスとともに会話することもできない。フェリクスの失望は募るばかりであり、オーロラが彼に見せたいものとして『アンティゴネー』を演じることを意味も果たして理解できたのだろうか。オーロラは『アンティゴネー』の中に彼らの生きている時代を見ていたのだ。運命に翻弄され、自らの生をコントロールできない、そういう時代に彼らは生きているのだ、よほどに幸運に味方されない限りは自らの生まれた慣習から抜け出すことができない時代なのだ。宴の後、漸くオーロラと対話することができたフェリクスに、オーロラはフェリクスが軽はずみなこと、二人を分かちようなことをしないように願う^{*25}。フェリクスの葛藤は、しかし、最終的にはその時代の状況にあらがい、オーロラとの関係をすすめるためにこそ旅に出るという決心に変わる。

フェリクスの旅は何らのあてのあるものではない。理不尽さの支配する世界、運命に従うしかない世界にあっては、よほどの幸運だけがその道を切り開けるものとなろう。そして、確かにフェリクスはその幸運によって道を開くのである^{*26}。戦争中のある強力な王への進言により気に入られかけるが失態を犯し追い出されることは一見不運でありつつも、そこにとどまり、王の部下となってしまうことがオーロラへの道であるかは分からない。王の部下であるということは、たとえそれがフェリクス自らの力で認められたものであるにせよ、フェリクスの抜け出た自らの故郷での立場と同じような立場にとどまるという

*25 *After London*, pp.121-31.

*26 Felixの名が「幸運」を意味するラテン語から来ているのだとすれば、それはこうした彼の旅の幸運を初めから暗示するものであるのかもしれない。

ことになりかねないからだ。その後の旅では、死の都市と化したロンドンで危うく死にそうになりながらも、技術が失われたこの時代ではさらに貴重なものとなっていたダイヤモンドなどを見つける。そしてこのロンドンからの生還は、物語の最終局面へと彼を導く羊飼いの部族との出会いを彼に有利にする原因ともなる。フェリクスが死の都市から生還したのは神の介在があったからだ。

こうした旅の経過を幸運だと呼び得るなら、しかし、羊飼いたちとの暮らしの中で彼が指導者へと上り詰めていく経過は単なる幸運によるだけだとは言えないであろう。フェリクスは彼の弓の技術で羊飼いたちの宿敵であるジプシーとの争いを有利に導く。また彼の持つ知識は、羊飼いたちに要塞化の必要性を納得させ、水場の在り処を教え、薬草の知識を与えることになる。最終的にフェリクスを王にとの声が羊飼いのいくつもの部族からあがる。彼は王たることは拒絶し、その代わり戦時のリーダーになることを受け入れ、平時の指導者は現在の首長が担うことになる。

こうした一連のフェリクスの活動はまさに彼が故郷で否定されたあらゆるもので構成されていることに注意しなければならないだろう。貴族のものではないとされた弓の技術、あまりかえりみられることのなかったかつての文明の残した知識。ここにおいて野蛮な世界は反転する可能性を見せるのである。それがまさに W. J. キースが知性の勝利と見なしたものである。W. J. キースはこのジェフリーズの物語を「無知に対する知性の物語、暴力に対する頭脳の物語」とし、そこに「最終的には知性が報われる」瞬間を見出した^{*27}。この知性の勝利はオーロラと結婚するに足るだけのもの、自らの居場所とリーダーとしてあがめられる立場をフェリクスに与える。ここにおいて彼は終に不在だったオーロラ、宴の後別れて以来彼の想いの中だけで言及されることになるオーロラを迎えに行くことを決心するのである。こ

*27 W. J. Keith, *op. cit.*, pp.120-1.

の彼の知性でつかんだ世界を新たな故郷として。

フェリクスは、固定化されたと見える運命に逆らってオーロラへの希望をつないだのである。これは一見したところの反ユートピア的世界の中での未来への希望とも言えるだろう。これもまたユートピアへの希望とは言い過ぎであるのかもしれないとしても、フェリクスの知性をもたらす新たな世界への期待がそこにはあるだろう。この書は唐突に終わり、その未来が成功するものなのかどうかは分からない。オーロラとの再びの出会いがあるのかすらも見えない。ただそこには希望があるのみである。しかし、もしかすると、という希望は読者の中にもある。地形変動のあったイギリスの旅は未知な地形、世界を旅することでもあったが、その旅で行き着いたある海峡について、この物語の語り手は「我々はこの流れをフェリクス・アクィラがそれを観察し記録するまでは知らなかった」と記す。このことはフェリクスの記録が伝えられていることを意味するだろう^{*28}。すなわち、それは希望がつながったことを示すはずだ。『アフター・ロンドン』は確かに文明の徹底的な破壊とその後の世界の野蛮さの中に展開される物語ではあるが、不在のオーロラを巡ってのフェリクスの旅が、その彼のもたらす知性が世界を変えていく可能性を指し示すという意味では大いなる希望の物語でもある。

3 未来社会における女性の役割Ⅱ —『ユートピアだより』—

一方、『ユートピアだより』の場合は旅の最後においてはそばにその女性＝エレンは存在し続ける。テムズ川を遡る旅の途上でゲストはエレンと出会う。ゲストとエレンは一旦別れるもその後エレンはゲストを追いかけてきて合流することになり、旅の、この物語の重要な存

^{*28} *After London*, p.147. もちろん、この記述が旅の始まりの章に書かれてある以上、フェリクスが最終的に残したものではなく、この旅の途上で何らかの形でフェリクスの記録が他者に伝わったという可能性も否定はできないのではあるが。

在となる。そもそもエレンはこの安息の時代の異分子として存在する過去の礼賛者の孫として登場する。彼女は、その過去の礼賛者のこの国は「かなり悪い方向へと変わったのではないか」という観点からの論に対して、ゲストを代弁して過去の、現実のモリスの生きる世界を批判しつつ、この今の世界を好きなのだと言るのである^{*29}。エレンはこの世界におけるゲストの理解者であり、ゲストとある種のロマンスとも言える心の交流を持ち、語り合う^{*30}。

クリシャン・クマーも指摘しているように、この世界でエレンは他の存在とは異なる女性として描かれる。ゲストは「この不思議な娘」のそばにいてより幸せになるのだという。この娘は「この新世界で出会った全ての人々の内で私にとって最も見慣れない」存在なのであり、「全ての点で不思議と興味を起こさせる」のである。彼女は、この世界の人々が「あまりにも過去の歴史に注意を払わなすぎる」と述べ、そのことが世界を元来た道へと変化させるかもしれないとの懸念さえ述べる。この世界の人間は「幸せだけど、時代は変わるかもしれないから、私たちが変化への欲求に夢中」になってしまうかもしれないから、と言るのである^{*31}。こうした魅力ある女性でありつつ、世界への洞察力を見せるエレンとの関係性によってゲストはこの世界により深く結びつくのである。

しかし、このエレンが常在することによってある不安が醸し出されることになりはしないだろうか。彼女は这个世界におけるゲストの理解者であるのだが、その理解者であるということはゲストが別世界の人間であり得ることを理解しているということに他ならない。実際、ゲストが自らの境遇についてエレンに語った際、エレンはそのことに

*29 *News from Nowhere*, pp.156-8.

*30 ゲストのテムズ川の旅、ユートピア世界との関係性の構築におけるエレン、及びゲストとエレンとの関係の重要性に関しては Krishan Kumar, *op.cit.* を参照のこと。またゲストとエレンとの関係性については Jan Marsh, *op.cit.* においても言及されている。

*31 *News from Nowhere*, p.182 及び p.194.

気がついており、だからこそゲストに聞きたいことがたくさんあったので追いかけてきたのだと答える^{*32}。そしてゲストとエレンは語り合う、未来社会と過去の現実についても。エレンはゲストの生きる時代と彼女の生きる未来社会を対比させることで結びつける重要な存在でもあるのだ。このようにしてこのエレンの存在はユートピアにおけるゲストのひとつの希望であり、指針ともなるのであるが、しかし一方では不安要素ともなり得るのである。ゲストに対しての答えの中で、「あなたは私たちの一員ではない」と語るエレンは、その語りの意図はともかく、ゲストに、読者に私/我々はユートピアの外側の存在であることを突きつける。そして、このユートピア世界の旅の最後、彼女だけがこの世界から去って行くゲストを認識するのである。ゲストがこの世界から消えゆくとき、あるいは現実世界に帰らざるを得ないとき、共に旅をしてきたはずのディックとクララは全くゲストのことを認識し得ない。しかし、エレンのみは利他的ににせよゲストの姿を認め、悲しげな顔で首をふるるのである^{*33}。

ゲストがエレンに惹かれ、この世界を愛すれば愛するほどに、エレンの存在はその意味で不安の常在ともなり得る。私＝ゲストはこの世界ではやはりゲストなのだという呼び名の再確認。それはこの著作の最後、ゲストが十九世紀の「薄汚いハマスミス家のベッドに」横たわり、自らの見てきたことを考える場面に示されている。ゲストはそれほど絶望してるわけではない、と言う。そして、自らの経験した旅を単なる夢でないリアルなものだという感覚を持つ。「私」はそれを確かに眺めてきたのだ、「ゲスト」として。「ずっと、あの友人たちは私には本当にリアルなものだったけれども、彼らの内にいて何ら出る幕のない存在であるかのように感じていた」のであり、未来の生活の

*32 *Ibid.*, p.188. クリシャン・クマーはこの過去からの訪問者であるという理解が彼らの結びつきをより強めたのだと指摘する (Krishan Kumar, *op.cit.*, p.100)。

*33 *News from Nowhere*, p.209.

全体を「外から」見ているのだという意識を常に持っていたというのだ。そして、彼の想像の中でエレンは語る、「…あなたは私たちの内にいることはできません… 帰りなさい、そして私たちを見たことで、闘いにも希望が少しは増したでしょうから、より幸福になるのです」と。そして「フェローシップと安息と幸福の新しい時代」を築くようにと^{*34}。

エレンはここでユートピア世界におけるゲストの理解者、過去から来た人物であるということを理解している者としての役割を強烈な形で遂行する。あなたは我々の世界の人物ではないのだから帰らなくてはならない、という事実を突きつける。ゲストにゲストの時代の現実とこの世界の美しさ、すばらしさを対比するよう促す。ゲストが過去から来た人間であることを告白する直前、エレンはこの小さな素敵な国が「まるで醜く何ら特徴のない荒廃した土地であるかのようにその住民に扱われた」時代があるのだとは信じられないと述べる^{*35}。当然ゲストはその時代をエレンよりも知っている、現実のものとして。最終的には上述したように、エレンは、想像上のエレンの言葉ではあるけれども、その過去から来たゲストに過去へと帰り、この新たな世界をもたらすべく闘いなさいと告げるのである。ユートピア物語が完結するためにはその経験者が現実世界へと帰ってそれを語らなければならない。そうでなければ、特に社会主義の運動として語られるべきユートピアは力を持ち得ないからだ。しかし、これは残酷なことだとは言い得ないだろうか。ゲストは「それほど絶望しているわけではない」と言う、それは新たな世界を作り得るといふ社会主義者としての期待と信念の表れであろうか。エレンは、ここではゲストを元の世界へと帰す導き手でもあるのだ。

この物語におけるエレンの存在は重要なものである。この物語の後

*34 *Ibid.*, pp.210-1.

*35 *Ibid.*, p.187.

半の旅の核となり得る存在だし、また闘争への希望へと私/我々を叱咤してくれる存在でもある。しかし、とそこには続く可能性もある。しかし、この世界を私/我々はモリスと同じように目指すことができるだろうか、と。エレンという、ゲストと個人的な関係性を結んでいるこの女性の存在がこのユートピアのひとつの核なのだとなれば、モリスの描く未来社会の魅力のある部分は確かにこの女性の存在によってと言える。モリスが語るように、思い描く未来社会像は常に個人のものである。それは開かれることによって、そして共有されることによってヴィジョンとしての力を持ち得る。ただ、それは共有され得るという可能性を開くだけである。このことは大いなる期待でありつつも、大いなる不安であり得る。エレンの問いかけ、叱咤はエレンのいる未来につながるのだろうか。私/我々は果たしてそれを共有できるのだろうか、その世界を本当に受け入れられるのだろうか、多くの人々がその世界をつくりだすために立ち上がるのだろうか、と。あるいはエレンの存在を我々も同様に魅力だと感じられるのだろうか。それらの問いかけの、疑問の生まれるその瞬間にユートピアは色あせてしまう。このユートピアは誰にとってもユートピアなのだろうか、それはもしかしたら反ユートピアだと見えるかもしれない。そのようにしてユートピアと反ユートピアの境はますます混沌としてくる。モリスの描くユートピア世界にエレンの祖父のようにその世界になじめないと主張する過去の礼賛者がすでに入り込んでいるように。

おわりに

ジェフリーズの描くフェリクスはオーロラを迎えに行く希望を持って旅をし、そのことに成功を収める可能性を見出す。そしていよいよオーロラを迎えに行くところで物語は突如として終わる。しかし、これは「知性の勝利」であり、「希望の勝利」に彩られたものだ。もちろん、オーロラを迎えに行く前にフェリクスが死ぬ可能性も、たどり着かない可能性もある。しかし、そこには希望がある。オーロラはこ

の物語では一部の箇所を除いて常に不在である。しかし、この不在が物語を動かし、フェリクスを動かし、成功へと導いていく。そしてオーロラを巡ってのフェリクスの冒険は、終にはこの野蛮な世界に光を投げかけるのである。

一方で『ユートピアだより』のエレンは旅の後半においてゲストと常に行動しながら、ゲストの導き手となる。エレンは常在する。ジャン・マーシュの指摘するように、そこにはある種のロマンスがある。しかし、ゲストが元の世界に戻るべき運命にある以上そのロマンスは決して成就することはない^{*36}。ゲストはあくまで「ゲスト」であってエレンは実は彼にとっては、たとえその存在のリアルさという確信を持っていたとしても、遙かに未来社会の幻のような存在に過ぎない。この未来社会の「経験」を持って、ゲストは強制的にユートピア世界から排除され、元の十九世紀に戻ってくる。そこには希望がある。未来社会を見たことによる希望が。しかし、その希望は多くの者が同じように見れば、であるだけでなく多くの者がその実現のために動けば、という条件付きのはかない希望であるとも言える。

オーロラの不在とエレンの常在は物語を進展させるひとつの構成要素として働くという点で同様の役割を得ている。しかし、反ユートピアとも見えるジェフリーズの『アフター・ロンドン』とユートピアであるモリスの『ユートピアだより』は、この不在/常在の女性の役割を通して眺め直すと違った側面があらわになってくる。明るい希望、確かな根拠はなくとも、を感じさせる終焉、あるいは再出発と、未来への大きな希望を与えてくれるはずでありつつも一抹の不安を残してしまう終焉、あるいは再出発。フェリクスは自らの手で道を切り開き、オーロラを迎えに行く。一方でゲストは、たとえ人々が希望を抱いて運動が広がったとしても、エレンに再び巡り会うことはないだろう。先にも述べたように『ユートピアだより』の中で描かれる革命は

*36 Jan Marsh, *op.cit.*, p.124.

1952年のことであり、ゲストの訪れた世界は22世紀のものである。もちろん、モリスのそれがユートピア世界の提示による民衆の運動たるべき社会主義運動の高揚という点に意味を持つことは否定しないし、そのことは大きな意義を持つと言える。しかし、ことこの希望、希望の存在である女性の不在/常在というものへと視点を移したとき、この二つの物語は異なった側面を見せるだろう。